

## はじめに

---

日本語教育センターは、2016年度から3週間の短期日本語プログラムの展開を開始した。2016年度は試行、2017年度が本格実施の1年目となる。

この取り組みは、現在本学が鋭意取り組んでいるスーパーグローバル大学創生支援の活動の一環として位置づけられるが、本センターとしては「留学生にも日本人学生にも有意義な国際化」に資する企画として大切に育てていきたいと考えている。そこで今年度の日本語教育センターシンポジウムは、本短期日本語プログラムの特徴の一つである「日本文化社会講義」に焦点を当てて、「[短期日本語プログラムは大学の国際化にどのように生かせるか—日本文化社会講義を通じた学部との連携—」を企画した。

「日本文化社会講義」は、プログラム参加生が本学の学生として本学での学びを経験する機会として位置付けて、学部の教員による講義と、これに関連したフィールドトリップを核に構成している。講義やフィールドトリップには異文化コミュニケーション学部の翻訳者・通訳者養成プログラムとも連携して展開しており、各活動は学ぶ活動を通じた立教生との交流の場が創出されることが多く、プログラム参加生からの評価が高い。一方で、この取り組みの課題は日本語教育センター単独の努力では実現できず、各学部や学部教員の理解を得て、力を借りることで初めて実現する企画だという点にあり、今後本学に根付かせていくには、大学、学部、そして学部教員の理解と連携、協働が不可欠である。

シンポジウムは「日本文化社会講義」の概要と趣旨説明の後、韓志昊氏（観光学部教授）、ライトナー・カトリン氏（コミュニティ福祉学部助教）、武田珂代子氏（異文化コミュニケーション学部教授）による「日本文化社会講義」における実践の報告のあと、池田伸子氏（異文化コミュニケーション学部教授、前日本語教育センター長）による短期日本語プログラムから見えるこれからの日本語教育の可能性についての報告があり、つづいて第2部では、小塚守氏（国際化推進機構課長）、森田浩史氏（総務部新座キャンパス事務室事務部長）のお二人をコメンテーターに迎え、フロアを含めた全体討議を行った。

当日は学内の教職員をはじめ、学生、学外の方々と、約35名の参加があった。参加者からは本取り組みと事例報告、率直な議論が高く評価され、本センターの取り組みに強い関心を寄せていただいた。

## 2 はじめに

今回の企画はご登壇くださった先生がたはもちろん、2016年度、2017年度の「日本文化社会講義」に力を貸してくださったシュールズ・ダグラス先生（経営学部）、杜国慶先生（観光学部）、中込さやか先生（GLAP）、奈須恵子先生（学校・社会教育講座）、中山真理子先生（現代心理学部）、加藤睦先生（文学部）、庄司貴之先生（観光学部）、江口正登先生（現代心理学部）、田島夏与先生（経済学部）、日本語担当の先生がた、そして山口和範先生（国際化担当副総長、国際化推進機構長）、豊田由貴夫先生（キャンパス連携担当副総長）ほか多くの関係者に支えられている。立ち上げ期で短期日本語プログラムがどのようなものかの認知がこれからという中でご協力いただいたことに心からお礼申し上げたい。またご参加くださった皆様にも厚くお礼申し上げたい。最後に、企画・準備段階から本報告書をまとめるまでご尽力くださった日本語教育センターの皆様にご心から感謝の意を表したい。

日本語教育センター長／異文化コミュニケーション学部教授

**丸山 千歌**